

柳沼良太氏 博士（文学）学位請求論文
「プラグマティズムの教育理論に関する研究—デューイからローティへ—」
審査報告要旨

柳沼氏の本論文は、アメリカの世界的に著名な2人の哲学者デューイとローティをとりあげ、両者のプラグマティズムとその教育理論がいかなる点で通底しあい、またいかなる点で異なるかを解明することを試みた労作である。

1980年代以降のプラグマティズム復興とデューイ再評価の動向を決定的なものとするうえでローティが中心的な役割を演じたことはよく知られているし、ローティ自身も公然と自らの立場をデューイのプラグマティズムを継承するネオ・プラグマティズムと称している。しかし、ローティのネオ・プラグマティズムとそこから派生してくる教育理論がデューイのプラグマティズムとその教育理論を全面的に受け継いでいる訳ではないことは明らかであり、両者の連続性については否定的な見解を提示する内外の研究者も少なくないのが実状である。このような事情を考えれば、プラグマティズムの教育理論を考究するにあたって本論文がデューイとローティをとりあげ両者の比較研究をテーマとして設定したのはまことに当を得たことであるといえる。

本論文は、序章と終章を含めて全部で6つの章から構成されている。まず序章ではテーマの設定を行ってから、先行研究の問題点を指摘したうえで方法論的考察を展開している。続く第1章と第2章はそれぞれデューイのプラグマティズムとその教育理論にあてられている。第1章では、デューイの思想を前期・中期・後期の3つの時期に区分することの意義を強調して、デューイにおける前期・中期・後期のプラグマティズムの特徴を分析している。前期における新ヘーゲル主義の枠組みに実験主義がとりいれられてプラグマティズムへの方向づけが明確になり、それが中期の道具主義に発展し、やがて後期にいたって「自然主義的形而上学」に到達する動きが、丹念に追跡されている。第2章は、デューイの教育理論を前期・中期・後期の区分に即して論じている。前期における実験主義教育の理論と新ヘーゲル主義との結合関係、プラグマティズムを本格的に展開するにいたった中期の教育理論の核心というべき問題解決学習、後期における教育理論において大きな比重を占めることになった宗教教育と芸術教育などの諸問題が追究されている。第3章と第4章は、それぞれローティのネオ・プラグマティズムとその教育理論にあてられている。第3章は、歴史を超越した普遍的なものの探究を志向する伝統的な西洋哲学に対するローティの徹底した批判の延長線上にそのネオ・プラグマティズムを位置づけ、歴史的に制約された言語によって媒介される「会話」の営みや「物語」の意義を強調するローティが啓発やアイロニーの働きを重視する「リベラル・ユートピア」を構想していった事情を論じている。第4章は、このようなローティのネオ・プラグマティズムから派生してくる教育理論をとりあげている。初等・中等教育には社会化の機能を対応させ、高等教育には個性化の機能を対応させることを骨子とするローティの教育理論が、実は、そのネオ・プラグマティズムにおける歴史主義的なスタンスや啓発の働きの重視と密接にかかわっていることが

明らかにされるとともに、ローティの教育理論にむけられた各種の批判がとりあげられている。

以上をうけて終章は、デューイとローティとのあいだに確認される非連続性ならびに連続性にかかわる論点を整理し、結論を提示している。デューイのプラグマティズムが（特に中期において）科学の探究方法を重視する経験論の色彩が濃く、その教育理論においても子どもの興味・関心を子ども自身の経験の発展過程に位置づけているのとは対照的に、ローティのネオ・プラグマティズムは科学の探究方法にはこだわらない言語論的な性格が目立ち、その教育論では子どもの興味・関心よりも子どもの社会化が優先されているといった相違が確認されるにもかかわらず、歴史主義的なスタンスに徹して未来を志向している点においても、また個人の成長と同時に人間同士の連帯をめざす教育を構想している点においてもローティはデューイを確かに継承しているという指摘は、終章で提示された結論のなかで特に注目される部分である。

デューイの教育理論に関する内外の先行研究はきわめて多数にのぼるが、本論文にみられるようにデューイのごく初期の思想から後期の思想までを一貫した方法論的自覚をもって意欲的かつ丹念に俯瞰したものは稀であろう。デューイのよく知られた著書だけではなく、一般にはほとんど知られていない多数の論文をもとりあげて綿密な考察を施している点は本論文の大きな長所である。ローティの教育理論に関していえば、これまでさまざまな賛成論や反対論が内外で提出されてはきたものの、ローティのネオ・プラグマティズムとの密接な関連をみすえたうえでデューイのプラグマティズムの教育理論と対比するという、本論文で展開されているような本格的な研究は、少なくとも我が国ではこれまで前例がないであろう。貴重な学問的貢献というべきである。

本論文は、デューイの思想傾向が途中で何回か大きく変容している事実を重視して、デューイのプラグマティズムとその教育理論を前期・中期・後期の3つの時期に明確に区分してとりあつかう方法を一貫して採用している。本論文が採用しているこの方法は、やや図式的に過ぎる面があることは否めない。とはいえ、プラグマティズムとその教育理論におけるデューイからローティへの連続性如何あるいは両者の非連続性如何を解明してゆくうえで、錯綜した事態をときほぐしてさまざまな論点を的確に整理するうえで本論文の方法が効果を発揮していることは確かであり、本論文の評価が方法論的に重要な点で損なわれることにはならないと考える。

以上の諸点を勘案して、本論文は博士の学位を授与するに値するものと判断する。

2005年7月5日

主任審査委員

早稲田大学教授

梅本 洋

早稲田大学名誉教授 文学博士（早稲田大学）

市村尚久

早稲田大学教授 文学博士（早稲田大学）

喜多明人

早稲田大学教授

山西優二